

## 第 8 回豊島島の学校 記録

### スケジュール

- 1 日目 ( 2 0 日 ) オリエンテーション、不法投棄現場見学、島内観光、盆踊り体験
- 2 日目 ( 2 1 日 ) 授業、地曳網、海水浴 ( 希望者 )、BBQ、海ほたるの観察 ( 希望者 )
- 3 日目 ( 2 2 日 ) シンポジウム

### 参加者

86 名 + 15 名 ( 講師 )

### 1 日目

神戸大学の倉地清隆さんから受講者代表挨拶があった。倉知氏は「産廃の量などは数字では知っていたが、実際に現場に来てみたかった。産廃問題が日常だった若い住民の話を知りたい」と述べた。

事務局より宿泊所場所の紹介など、全体のオリエンテーションがありました。また、豊島学(楽)会の“共に創ろう分科会”から会期中のマイボトル活動に関する説明された。

#### 不法投棄現場見学

4 台のバスに分乗して、住民会議の安岐氏らより関係個所において不法投棄を行っていた業者の家やダンプで運んでいたときの様子などの解説を受けた。

現場の中間保管・梱包施設に到着後 2 階のオリエンテーションルームで事件を 20 年間撮り続けてきた山陽放送の曽根記者が作成した事件に関するビデオを上映した。巨大なダンプカーで廃棄物を運搬しているときの様子、ゴミの島となってしまったと嘆く住民の姿、兵庫県警による摘発など公害調停までの前史のビデオが最初に上映された。続いて不法投棄現場の調査、石井亨氏の香川県議会議員への当選、公害調停の成立から現在に至るまでの近代史についてのビデオが上映された。

その後、中間梱包施設、高度排水処理施設、現場内、こころの資料館の見学を行った。こころの資料館では住民会議の方から展示してある事件の資料をもとにこれまでの戦いの歴史や廃棄物の断面を見ながら何もなかった状態から数 m にも上る高さまで廃棄物が積み重ねられていく歴史を説明された。

#### 夕食から盆踊り

家裏岡の集会所で夕食としてままかりのちらし寿司やそうめんが振舞われました。夕食後には小学校の体育館へ移動後、地元の有志らによる盆踊りの講習会が行われ初めて豊島の盆踊りを踊る参加者も見よう見真似で練習した。一通り練習が終わった後は校庭で濱中氏、堀氏の太鼓の音頭に合わせて地元の方々と踊った。

### 2 日目

午前中は小学校にて授業が行われました。早稲田共創クラス、科学技術者クラス、法律家クラス、メディアクラス、地域社会クラスに各受講者がそれぞれの希望のクラスにおいて豊島をさまざまな角度が

ら学んだ。授業終了後は体育館に移動して記念撮影を行った。

家浦丘の集会所にてそうめんをいただいた後、地引網会場へ移動した。引き上げた網にはウミタナゴ、タコ、ペラなどたくさんの魚が取れた。地引網後、希望者のみで海水浴を楽しんだ。

2日目の夕食はBBQだった。昼間に取った魚やタコを焼いて食べた。最後に水中の微生物で刺激を与えられると青白く光る海ほたるの鑑賞会も開かれた。

### 3日目

3日目は小学校の体育館にてのシンポジウムを実施した。濱中氏から開会の挨拶がされ、今年も多数の参加に感謝の意が述べられた。廃棄物の撤去が60%完了し、完全撤去を楽しみにしている。さらに、テーマにある“絆”や“拍動”を大切に人のネットワークを大切に一步一步進んでいきたいと述べられた。その後、黙とうが行われた。

#### 2日目のクラスの報告

科学技術者クラス 川崎（豊島ネット）

石川県立大学の高月先生は当時、京都大学の先生で、技術検討委員会の一人として関わり始めた。

廃棄物を考える上でのキーワード PPP・EPR・CSR の3つである。これを考えると廃棄物の問題がよくわかる。この3つの言葉を頭に置いて廃棄物の問題を学んでもらいたいと思います。

家庭ごみの組成調査を30年続けている。かたいごみを300品目に分けて、調査し、家庭から出てくるごみを統計処理している。このデータを基に家庭ごみの収集経路等を決めるのに役立てている。家庭ごみは容積で見ると、容積が多くを占めているため、減量化に向けては容器との戦いである。

手をつけていない食品廃棄物があまりにも多い。賞味期限内のものの中にはあり、日本の文化として非常に大きな問題があると考えている。

豊島事業は共創の理念元行われており、管理委員会が年2、3回のペースで行われている。もう少しで完全撤去に至る。大きな山は越えたと思っている。

メディアクラス 南（阪南大学）

関心が高い情報はメディアがたくさん報道しているので、情報を得やすいが、ミャンマーで発生したサイクロンによる事故による被害者の数はなかなか情報に乗らないためにわかりにくい。14万人が亡くなった。

日本を中央と考えると、ミャンマーは周辺にあたる。逆に東京や大阪に住んでいると、豊島に周辺に相当する。周辺の問題は都心部の人に興味を持ち続けると取り上げられない。ごみの問題、環境問題（CO2の排出をはじめ）についても同様に、中央に住んでいるものが関心を持ち続けていくことで、メディアが情報を取り上げ、それによってさらなる関心と呼ぶと考える。

早稲田共創クラス 切川（早稲田大学）

参加者を初めて豊島に来たグループ、2回以上来ているグループに分けて、それぞれが感じる豊島の魅力についてディスカッションを行った。その結果を豊島住民の方に聞いてもらい、印象を述べてもらった。その後、豊島で動いている各プロジェクトの解説と他の地域で実施されているプロジェクトの概要について説明を行った。さらに市村氏に協力いただき、写真を使って“景観”“生物”“食”の3つの方

向から豊島について説明してもらった。これらを受けて、最後にそれぞれが感じる豊島の魅力についてディスカッションをしてもらい、クラスを終了した。参加者から魅力としてあげていた“自然”とはなんなのか？についてそれぞれの課題とした。

#### 地域社会クラス 中島（早稲田大学）

豊島の中学生から“豊島石の謎を解く”という台で理科・社会の視点から発表してもらった。黒・白の豊島石の特長を報告した。保水力や風化への耐性について実験した結果を基に説明してもらった。稲田講師からは昭和43年、平成16年の豊島の地図を基に農地面積の変化を比較したり、有効に活用されている農工面積がどれくらいあるのか等について説明してもらった。

#### 法律家クラス 杉田（神戸大学）

テーマは「なぜ公害調停といった方法をとったのか？」「法的手段の活用について」「完全撤去に至るまでの道のり」についての内容であった。

完全撤去を実現するため、他の手段も含めていろいろなものを検討した結果、一番の方法として公害調停を選択した。香川県に撤去させることが難しかった。公害調停委員会として自ら調査を行うことができるようにすることで、公害調停の成立に至った。これには住民の方々の努力も非常に大きく影響している。弁護士のみでは実現できなかった。すべての関係者が最大限の努力をしたことによって実現できた、法的手段だけではさまざまな人の連携によって実現できたと考えている。

杉田氏はたった一つの業者が被害をもたらしたこの豊島事件によって、廃棄物関係の法制度の制定・改訂に対しても影響を持つに至った、この事件によって社会を動かしたということに関心を持ったと感想を述べた。

#### 基調講演 曾根（阪南大学 元山陽放送記者）

地球村と呼ばれるくらいグローバル化した世界において、“わたし”って何なのか？について話したい。20年間、テレビの記者として豊島に関わってきた。豊島に寄り添ってきたとも言えると思う。強いものと弱いものがいたら、弱いものを見方をするのが、メディアの役割であると思う。

今回のテーマは“テレビが描いた豊かの島ニッポンの豊島20年 あなたは豊島に何を見ますか？ 私は・・・”とした。

豊島事件が発覚する1990年がどんな年だったか？今回は学生の参加が多いので、生まれていない、あるいは2歳、3歳だったという人もいるだろう。1990年はバブル期だった。東京で働く女性の服装一つ見ても華美で、日本人が豊かさを勘違いしている時代だったと思う。そんな中で豊島の事件が起きた。

私と豊島とのかかわりについて話す。1990年のゴールデンウィークに『ニュース23』（TBS系）の筑紫哲也キャスターが瀬戸大橋の橋脚の島・与島から全国放送した。番組開始から半年、地方の目線があるという筑紫さんの初のキャラバンだった。放送後の夜の打ち上げの席で、「地方はどこも、過疎、高齢化が」と私が愚痴った。「中央との関わりがないかな？」と筑紫さん。「東京からゴミが来ている島があるらしい」と私。「やろうよ」と筑紫さん。探してみるとゴミが来ていたのは豊島、豊島を取材することになった。

唐櫃（からと）そばに10数万トンもの建築廃材が運び込まれていた。ルーツを探ろうとゴミの山を

漁ると東京都豊島区の文字のある設計図らしき物を見つけた。ゴミを掲げて上京、豊島区池袋の共同溝工事から出たものと突き止めた。バブルで「豊かな島・ニッポン」の2つの「豊島」。同じ名前で「ゴミを出す側」と「捨てられる側」という現実、というのが全国への最初のニュース特集となった。行政はどういう対応をするのかを、環境庁を取材すると、「ゴミ問題が足かせになって都会のインフラ整備ができないなど影響を受けることになっては」との回答。「地方が困る」との答えは聞かれなかった。ドキュメンタリーになればと取材を本格化。島の玄関口の家浦港から白昼堂々の産廃の陸揚げに出くわした。瀬戸大橋開通で廃船となったフェリーを改造したゴミ船がトラック百数十台分もの産廃を積んでやってきた。「豊島やのうてゴミの島や言いよる」と島民。「県が許可を出しているから、何を言ってもだめなんだよね」と諦め顔。取材の島通いが続く。島の若者11名からなる「豊島作ろう会」を取材したり、石工だった広吉じいさんの日常を描いたりした。

そうこうするうちに兵庫県警が玄関口から陸揚げをしていた業者を摘発した。ゴミ船を追尾、「ミミズの養殖を騙った数十万トンの産廃の不法投棄」が容疑だった。私は前日まで瀬戸大橋そばの小与島で「島丸ごと買いあげて」というリゾート開発計画を取材していた。ガサ入れの情報に豊島に急行、摘発の一部始終を取材した。シュレッダーダストという自動車解体ゴミが野積みされ、ドラム缶の廃油が焼かれ煙を上げる。豊島のリーダーの一人、安岐正三さんは現場沖合いのハマチ養殖の筏で餌やりの最中に摘発を知った。ヘリ空撮で安岐さんの様子も撮影した。その日のインタビュー。「県に何度も話に行ったが、取り合ってくれなかった」と安岐さん。風評被害が起こるかもと心配を口にした

豊島住民はすぐに廃棄物対策豊島住民会議を立ち上げた。半年後には香川県が安全宣言を出すのだが、私たちが岡山大学の専門家に磯の生物を持ち込んだことから、重金属汚染が判明する。所謂、調査報道。メディアは自分たちで調べて、結果を報道していく。自分たちの報道が事件の風化を防いだとも考えている。以後、豊島の住民の闘い、中坊弁護士を味方に草の根の苛酷な闘いを報じていくことになる。

私の豊島取材は数えてみると約600日となる。多いときで年間60日も豊島に来ていた。会社もよくやらせてくれたと思っている。豊島の住民がメディアを本気にさせたのかもしれない。2つの意味で豊島はシンボルなのだと思う。産廃の不法投棄のひどさと、住民の闘い。住民の側を向かない行政。これらを全国に報道していった。島の闘いがどんな結論を出すのかを全国が見つめているという気持ちで放送していった。住民の代弁でもあった。「ニュース23」の特集は15本を超える。ドキュメンタリーも9本作った。島の老婆が「こんな島もあるんぞと伝えて。あんたは通訳やから」と病床でつぶやいたこともある。

住民の立ち上がりの場面を取材したのは私たちクルーだけだった。1993年9月、島民が大阪の事務所の中坊弁護士を訪ねた。「業者相手に勝ってもゴミが島の外に出なければ何の意味もない。住民のエゴの闘いであってもいけない」と中坊さん。その直後に豊島を訪れ現場に立った。いろんな政治家もやってきたが、長靴をはいて産業廃棄物の山の斜面を降りたのは中坊さんだけ。「臭いニオイするね」と自分の目で見て、鼻で嗅ぎ、体で感じる現場主義の人であった。その足で、公民館に移動して住民と向き合った。「子孫のためどこまで本気でおやりになるのか」と住民に問うた。安岐さんは「このまま何もしなかったら、何も変わらない」、若手のリーダーの一人の石井亨さんは「やるなら、やれるところまでやってみるしか」と。慎重な長老たちも「問題は闘うお金をどうするかなや」と、ついには島挙げて闘うことを決断、島の闘う態勢・意思を築きあげた。

裁判には「対等の原則」というがある。例えば1000万円の調査費がかかったときには、住民も500万円の負担がかかってしまう。豊島は産廃問題では全国初の公害調停を起こすにいたるのだが、中

坊弁護士の「裁判は使いたくても弱者には使えない」という言葉を今でも覚えている。検体一つ取るにも巨費がかかる裁判を弱者の住民は起こしたくても起こせないというもの。「事実の確定」からまず始まるという法の世界にあって、住民側の選択は調査費用などは調停委がしてくれる国の公害調停しか道がないというものだった。「県の責任を問い原状回復を求める」公害調停である。1993年11月、民事の時効寸前に滑り込んだ。公害調停の申請と合わせて、香川県庁への150日間の立ちっぱなしの抗議などを豊島の住民が展開した。調停委も根を上げ2億3500万円かかった現地調査を実施した。

取材者の私が見たものは住民の苛酷な闘いでもあった。調査で磯のカキからも高濃度のダイオキシンが検出される事態を辿る。中坊さんから私に「会いたい」との電話が入った。汚染の事実をどうするか。「陸で生活する者は良いが、海で生活する者には死活問題だ。その安岐さんはすべて公表してと言っている」と中坊さん。公害調停には全てを公表する義務はなかった。「マスコミの私がどうこうせよ言うことはありません」と原則論の私。中坊さんはありのままを公表することになるのだが、「あまり騒ぐなよ」ということであつたのかも知れない。安岐正三さんにはハマチ養殖の廃業を自ら決めることになる汚染実態の判明・公表だったが、安岐さんは「都合のよい情報だけを出すのでは世論の支援を得られない」と身を切る闘いを続けて行った。

その後の闘い。「こんなにも闘った島があるだろうか」、「こんなにも住民の側を向かない行政があるだろうか」、これが率直な取材者の思いだった。「住民の闘いは根なし草」と大物県議が発言。「(住民は)欲しいから。金が」と県知事。こんな逆撫での中、人口千数百人の豊島は小さな島から県議選に石井さんを立候補させ、島挙げての闘いで当選させる。県民が草の根の豊島の思いを後押しした。2000年には「隣の直島の精錬所での産廃処理」で調停が最終合意、知事が訪れて謝罪した。2003年から産廃の撤去が始まって、2010年夏でおよそ57パーセントの産廃が撤去されている。全ての産廃撤去完了は2013年春が予定されている。産廃事件の摘発からでも23年という歳月がかかることになる。同じ業者が有害処分場を計画、島民が大漁旗を掲げて県庁へ押しかけたのが1977年であった。有害でない一般廃棄物を餌にミミズの養殖をすると矛先をかわした業者に、当時の県知事が「業者にも生きる権利がある」と許可してしまう。行政のボタンの掛け違いという発端から言えば、40年の歳月がかかることになる。

民の闘いは過酷である。産廃の撤去に10年。10年掛かってようやく「マイナスからゼロ」になるだけである。豊島の人にとっては40年間もゴミに翻弄され続けて来たことになる。それだけでなく、「プラスに転じるためにどうするのか?」島再生という重い課題が待っている。豊島の高齢化が進んでいる。現場に住民が手作りで作った資料館には剥ぎ取った産廃の断面と共に公害調停申請人の名簿が張られている。549人のうちすでに200人に喪章がついた。闘い疲れ、分裂傾向、闘いへの温度差、執念の違い……まだこれ以上闘えというのも過酷でもある。

“豊島事件、完全撤去まで後年”と言うのは簡単だが、豊島の島民にとっては、闘いは継続中である。私たち世間の無感動、無関心が豊島事件を起こし、島民の半生を闘いに縛るような苦しみを与えたのかもしれない。中坊弁護士は私に「豊島の人たちは自信を失っている。自信を取り戻せば、また元気になりますよ」と最近、述べた。島の人たちそれぞれの闘いがあつた豊島事件、豊島の人たちの闘いが社会や政治を変えたのだけは間違いない。

(質問)

・豊島以外の青森・岩手の事件についてはどこに原因があるのか?

豊島が一つのケースになればよいと言っている大学の教授がいる。事件の解決に向けて500億円以上のお金がかかる。あの処分地は言わば聖地だ。あの場所、あの島がこう変わったよ！というのを参加の方々、関わってきた方々に見せたいものだ。

・豊島は最近、芸術の島と言われているがそれについてどう感じているか？

芸術祭も素晴らしいが、豊島のアイデンティティは何なのか？をもう一度考えてほしい。何年後かはあれが芸術の島だよと言われるようになるかもしれない。しかし、「こんなにも住民が産廃と闘った島」というのがやはり豊島だろう。

#### パネルディスカッション

コーディネーター 影山（山陽新聞）

1998年 高松支社にいるときに豊島に関り始めた。2年間、調停成立の時に関わった。マスコミとして関わった2年間に何もできなかったのも、いまでも関わり続けている。“豊島の島民としてどうしていたか？”“マスコミだったら？”“県の職員だったら？”“国の家計者だったら？”などの立場で事件に関わったらどうなるか？

今回のパネルディスカッションではそれぞれの立場から豊島について話し合う。

岩城（豊島弁護団・弁護士、オリーブ基金 理事長）

平成5年の調停から中坊氏と一緒に豊島に関わり始めた。法律的には産廃の影響を受けた魚介類を食べて、死亡事故が起きない限り、撤去に向けた裁判を起こすことが非常に困難である。ごみの問題については廃棄物処理法があり、県が責任主体となって管理のもと、処理を行うことになっている。当たり前であるが、県が悪いことをすると想定していない法律である。そのため、本事件は特殊性を持っており、県が黙認していた事実が関係する。上記のことから、当時の法律のいずれにも当てはまらないため非常に難しい問題であった。弁護士としては時間を非常に使った件となった。

理屈が弱い、誰も見方をしてくれない状況だった。マスコミにおいても、県からの説明により、ある意味洗脳されている状況であり、理解してもらうのに苦労した。

当時、どれくらいのお金が必要なのか、わからなかった。200億円のお金を必要とすることが分かったとき、どうするのか？と毎日、暗い気分であった。

河崎（豊島ネット）

4つの柱を掲げ、豊島のことをマスコミが立ち上げる前に関わり始めた。河崎氏は当時、小豆島でアースデーに関わっており、隣の島で住民が困っており、説明会があるというので、豊島に行ったのが最初だった。アースデー豊島を毎年開催し、今年で14回目になる。マスコミ報道の整理や現場見学など、住民や弁護士のサポートをしている。

谷川（中央学院大学）

大学では教職をとるカリキュラムの一環として、社会地理学を教えている。社会科、地理の授業中で大きな位置づけを占めているのが、環境問題や公害問題である。子どもたちへの理解を促進するためには現場をしらなければならない。当時、一般に出ているマスコミ等の情報は知っていたが、その程度で

あった。1998年3月に放送された曽根氏のドキュメンタリー“泣き寝入りさせません”を見てから、豊島に関わり始めた。最初は教材に使おうと思って番組を見たが、関係を持つにいたった。初めて、豊島に来たのは2003年であった。当時、案内してくれた豊島住民の温かさに触れ、それ以来、年に2、3回、豊島に来るようになった。私自身も学びたいし、受け持っている学生も学んでもらいたいので、豊島に通っている。

西尾（早稲田大学）

当時、廃棄物は環境庁の管轄ではなかったため、非常に困った問題だと感じていたが、手を出すことができなかった。2001年に環境省になってから、廃棄物の問題が管轄になった。住民、弁護士、サポーターの人々の努力を感じた。2日という短い時間であったので、触り程度しかわかっていないので、これからもっといろいろと知っていきたい。水俣もそうだが、豊島も非常に風光明媚な場所であった。

その後、“学び”について、各立場からコメントをもらった。谷川氏からは地理学の立場からは現場に行き行って学ぶことが最も効果が高く、これからも継続していきたいと述べられた。河崎氏から豊島にたくさんの人を連れてきて、豊島のことをたくさんの人に知ってもらいたいと述べられた。

岩城弁護士からは当時の状況から近年にかけての思いが述べられた。島民の要求は“子どもたちに自分たちの島を残したい”という非常にシンプルなものであった。一番勉強したことは不法投棄された産業廃棄物からでた影響がどれくらいなのか、どうやって調査されているのか、などを弁護士をはじめ、住民も理解しなければならない。この勉強が一番学んだことかもしれない。多くの住民運動では被害者は何とかしてくれ！だけで終わるものが、豊島に関しては自分たちも考える！というスタンスで多くの勉強をするとともに、専門技術者の会議にも参加し、その内容を理解するとともに、質問・意見をしたりという経緯もあり、専門技術者も良い緊張感があった。住民がたくさん勉強をしたことによる効果の大きさを知った。この事件、弁護士が実施したことは通訳だったのかかもしれないと思う。オリーブ基金として一番大きな仕事は完全撤去後の処分地をどうするか？どう支援していくか？でないかと考えている。西尾氏からは豊島事件によって、行政が変わっていった状況を説明いただいた。環境省になり、廃棄物問題が管轄になってからは、不法投棄を絶対に起こさせないという命題の元、キャンペーン等を実施した。以前は1000箇所程度の不法投棄場所が発見されたが、近年は300件程度と減少傾向にある。環境省にとっても、豊島は突破をした良い事例となっている。21世紀は循環型社会を築いていかなければならない。これを実現するための大きな突破口になったと感じている。政策を立法する立場から考えると、ものが起こってしまってから始まるため、そこが難しいと考える。原則論としてはPPPの原則がある。

岩城 西尾

廃棄物としてではなく、汚染による環境への被害として動けなかったのでしょうか？

人の縄場ありに入ってはいけないという暗黙のルールがあったのかかもしれない。そのため、手が出せなかったのが現実である。環境庁としてはどうにかしなければならなかったもので、解決に向けて導いてくれたので、非常に感謝している。廃棄物の政策についてはまだ発展途上であり、これからも反省・改正を続けていく必要があると考えている。

“これからの豊島”についてコメント

岩城氏からは調停の条項の最後を締めるところにある。香川県が謝罪をどうするのか？が問題になってくるかと考える。香川県の失態を国費を使ってリカバーしているだけではないか。弁護士としてはごみが完全に撤去していくことが責任だと持っているので、最後まで監視を続けていきたいと考えている。

河崎氏からは香川県の小学校の副読本として豊島事件を取り上げる、現場に行きたい人がいれば連れて行くという対応をしていければと考えている。豊島の将来については豊島住民の問題なので、早く考えてほしいと思う。

谷川氏からは外の人なので、豊島住民に考えてほしいと考えている。10年間通っていると、豊島の変化を強く感じる。芸術祭など変化はある。若い人たちは芸術の島にしたいのかもしれないので、それはそれで見守っていききたいと考えている。ただ、県と戦った歴史を貴重な資源として守っていききたいと考えている。

西尾氏からはこれから発展してくる国に、日本が開発してきた技術や情報を活用していもらうと述べている。これは理論だけの話であるので、豊島のように実際に体験してきたことをいろんなところに活用してもらえるようになったらよいと思う。

#### 会場から児島さんからの感想

参加者の皆さま、ありがとうございました。北京からも来てくれてありがとうございました。豊島がこのように長く続いてきたのは、誰も得をしなかったことではないか、弁護士が強いリーダーシップをとってくれたことだと思っている。豊島の住民は良く泣く。泣くということほど、大きな住民運動はないと思う。自動車はブレーキがあるから、スピードが出せる。住民はいろんな役割をする人がいるから、これまでやってこられたと思う。豊島のことを忘れないでほしい、瀬戸内海にこんな島があることを思い出してほしいと思っている。

終了式では受講者を代表して北京大学の張さんより感謝の意が述べられるとともに、日中間の環境について考えていきたい、と挨拶が述べられた。修了証書は今年で8回連続参加の萱原さんに住民会議議長の濱中氏より手渡された。そして、クライマックスには安岐氏が作った『もう一度・いつまでも豊島』をミュージシャンの三好伸二さんの伴奏に合わせて参加者・住民全員で合唱して第7回豊島・島の学校は閉校した。





写真撮影：市村康氏